

とやまと自然

第23巻 春の号 2000

スズメ

「富山でバードウォッチング！」入門

／大田 保文 2

／高畠 晃 5



ルリビタキ

撮影：高畠 晃

富山市科学文化センター

スズメ

大田保文

はじめに

スズメは人里に1年中いる野鳥です。小さくて目立たない色をして、いろいろな行動を見せてくれるので、かわいく感じます。

かつて（1976年）黒部市立三日市幼稚園の園児150名に、知っている鳥の名前の調査をしたことがあります。その結果、スズメ117名（77.8%）、カラス89名（59.3%）、ツバメ68名（22.1%）で、合計56種でした。

その名前をよく知られるくらい、私たちの身近に1年中いるのはなぜでしょうか。スズメは自分が生きのびるために、ひなをうまく育てるために人里にいるのです。

スズメはどんな生活をしているのでしょうか。私が調べ、分かったことのいくつかを紹介します。

1 同じ地域にいるスズメと移動するスズメ

スズメは一年中同じ地域にいるので「留鳥」と呼ばれています。しかし、縄張りを持っている成鳥は同じ地域にいますが、その年に育った若鳥は縄張りが持てないので群れて遠くまで飛びます。脚に輪を付けて新潟県で放したスズメの若鳥が、岡山県や愛知県、三重県などで発見されたという報告があります。沖縄では約300kmも離れた島に人が住むようになったところ、その島にスズメが新しくすむようになったそうです。飛んでいて縄張りのない場所にうまく出会えると、そこにすみ、ひなを育てるのです。

また、人が住まなくなった地区では、1年位でスズメがいなくなった例がいくつもあるそうです。スズメにとって人里にはよいことがいくつもあり、スズメはそれらをうまく利用しています。

2 人を直接的、間接的に利用

（1）たくさんあるえさを探る

人里にはスズメのえさが人の生活していない自然の中よりもたくさんあります。

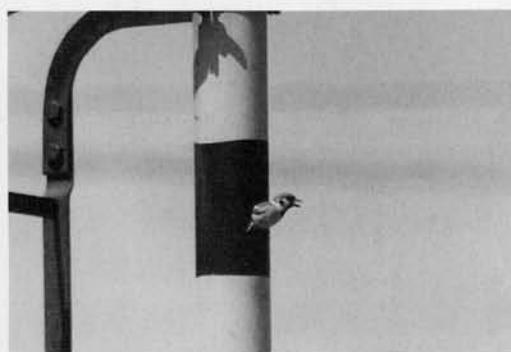


図1 駅の警報機の柱の中でひなを育てるスズメ



図2 竹の穴を調べているスズメ

水田や畑には人がたくさん植えたイネやムギがあります。土地を耕したりすると生える「人里植物」の種子があります。家にはペットのえさ、人の出した食べ物などもあります。植木には実がなり、昆虫類などもいます。

（2）人工的な空間を利用して巣づくり

人里には人が作った空間や巣の材料が、自然の中よりたくさんあります。屋根瓦の下、石がきの石の間、煙突の中、保育所のぶらんこの鉄管の中、駅の警報機の柱（図1）、そのほか「こんな所に！」と驚く所にも巣をつくります。

これらの空間を半年以上も前から探したり見張ったりします。図2の写真のスズメは、10月6日にイネを干す「はさ」の竹の穴を調べているところです。まず、上から竹の穴をのぞき、次に、穴に入ろうとしています。このような行動は8月から建物の換気口などでも見られます。

人がつくった建物にできた種々雑多な空間を利用するのですから、巣も種々雑多です。

巣の外側の材料は、たいていわらや枯れ草なのですが、ニワトリのいる所ではその羽を、マツ葉のある所ではそれをを使います。細い針金やビニールひもも使います。籠の中の巣箱では、材料のシュロ毛の1本1本にくちばしで唾液をつけて、シュロ毛がよくつくようにしています。

形は、瓦の下や煙突（横）の皿型、巣箱型の中のつぼ型などがあります。また、瓦の下や煙突（横）と同じ条件下でも天井のある巣があります。ほとんどの巣は、中が暗くなるようにつくるのに、明るい所に皿型で中が明るい巣があります。

巣のつくり方は、瓦の下では全体が柔らかく、換気窓の巣では底が大変堅くて厚く、通路があります。

重さは、コシアカツバメの巣を利用したもので45g、換気扇のカバーの中にあったもの438g、宇奈月町立浦

山小学校の天井裏にあったもの4280gと大きな差があります。

魚津市の教員、岡 明彦氏が、同市立体育馆の同じ閉鎖空間で、2年連続新しくつくった2個の使い終わった巣をくださいました。2個の巣の形はよく似ていますが2回目の巣は底が薄く、初めの巣より少ない労力でつくってありました。断定はできませんが、同じ2羽でつくった可能性が大きく、前の経験を生かして2回目はよりうまくつくったことになります。

のことなどから、スズメは種々雑多な巣を、生まれつきの力と、学習した力の2つの力でつくった、と考えると納得できます。

(3) 昔、家がなかった頃の巣づくり

野生のスズメは稀にですが、木の枝に球形の巣をつくり、「珍しい」と言われます。黒部市立東布施小学校の校舎と体育馆を結ぶ通路では、「昔の巣」を連想させる巣をつくって、ひなを育てました(図3)。



図3 「昔の巣」を連想させる巣(元東布施小学校教諭、目澤仁氏撮影)

のことから、現在のように人の生活圏を利用して生活する前のスズメの多くは、木の枝などに巣をつくっていたのかもしれません。

しかし、今日いるスズメは、どんなわけで木の枝に巣をつくらないのでしょうか。木の枝に巣をつくるのを忘れてしまったのでしょうか。

それで、籠の中で、野生のスズメと籠の中の巣箱の中で育ったスズメで調べてみました。それぞれの籠にオスとメスと思われる2羽を入れました。どちらのスズメも巣箱の中で巣をつくることが分かっていましたので、たくさん枝のある木を入れました。すると、2つの籠のスズメとも木の枝に球形の巣をつくりました(図4)。

のことから、今日のスズメには生まれつき2種の巣をつくる力を持っていることが分かります。人工的な空間と木の枝を比べて、人工的な空間の方を選んでいる、と考えました。

では、人里にある人工的な空間に巣をつくると、ど

んなよいことがあるのでしょうか。

それは、①風や雨に強く、長持ちするのでじょうぶな巣でひなを育てることができる。②たいていの人工的な空間は、中が暗いので、材料を選んだり編んだりする労力が少ない。そのほか、間接的なことでは、③自分や卵、ひなを襲うネズミ、ヘビ、などの天敵に襲われにくい、などがあります。



図4 篠の中で育ったスズメがつくった球型の巣

(4) 人をガードマンとして利用

スズメは自然の中でいつも天敵にねらわれています。自分で、自分と卵・ひなを守らなければなりません。自分がつかまらないためには危険を早く知り、素早く逃げます。若鳥のときは群れる方法もとります。

卵やひなは逃げることができないので、天敵が近づかないようにしています。それは、天敵より強いものの近くに巣をつくることです。そうすれば天敵はなかなか近づけません。自然では、トビやサギの巣に自分の巣をつくり、ひなを巣立ちさせるそうです。また、1羽でも多くのひなを育てるために、1年に2~3回子育てをします。

黒部青少年の家や砺波青少年の家では、食べ物の残りは全部車で運んでしまうため、人の出すえさはありません。しかし、スズメはそこに住んでひなを育てています。ここで多くの人が年中活動するので、スズメからすると大変頼もしいはずです。東布施小学校でつくった親鳥は、巣づくりの面倒さよりひなの安全を第一にして、児童を頼ったのです。保育所のプランコの例、駅の警報機の柱の例などもみんな人の強さを利用しています。電車の中で女子高校生のおしゃべりが急に、群れて鳴くスズメの声のように聞こえたことがあります。「おしゃべり屋」と言われる鳥ですから、人の声はスズメにとって、天敵を防ぐほかに、何かよいことがあるのかもしれません。

(5) 人里の自然のバランスを保つ

農林水産省の報告によると、スズメは自然では夏に昆虫を多く採り、冬はほとんど採りません。もし、昆虫が年中たくさんいたら、昆虫を年中たくさん採るの

ではないかと考え、調べてみました。スズメは親鳥1羽と県の許可を得て捕らえた若鳥1羽です。2個の籠の中に昆虫（ミールワーム）と玄米を年中多く与えて、各々の鳥が採ったそれぞれの重さを毎日量りました。

その結果、2羽とも毎日ミールワームを多く採りました。1年間に採った重さは、親鳥は合計3,480g、ミールワーム3,216g (92.4%)、玄米266g (7.6%)で、若鳥は合計3,446gでミールワーム2,642g (76.7%)、玄米804g (23.3%)でした（図5）。

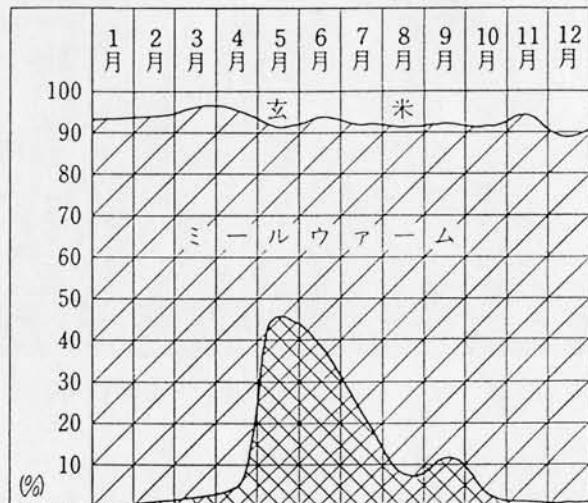


図5 月別の親鳥のエサに占めるミールワームの割合。
■は野外のスズメの動物食の割合(農林水産省の報告書より。)
親鳥は年間を通じミールワームを高い割合で採食していますが、野外のスズメでは動物食の割合は低く、ピークの5月は45.9%です。

次に、積雪が多い猛吹雪の夜、許可を得てスズメ7羽を捕らえました。翌日、1羽ずつにミールワームと玄米を与えました。すると、その日に、4羽 (57.1%) がミールワームを探りました。

これらのことから、スズメは昆虫を年中採る力のあることが分かります。自然の中では夏に昆虫が多くなり、冬には少なくなりますので、スズメのエサはこのような昆虫の出現に合わせているのでしょうか。夏に虫を多く採ることは自然のバランスを保つのに役立っています。

3 篠の中でひなを育てる

(1) オスとメスで協力

スズメのオスとメスは色、形、大きさ、模様などが同じに見えます。スズメは2羽が協力して巣作りや子育てなどをしています。自然ではなかなか観察できないので、籠の中で観察したことを紹介します。

昼夜むとぎや夜寝るとき2羽がぴったりくっついて寝ることがあります。2羽で材料を運んで巣をつくると、メスが毎朝、卵を1個ずつ産み、5個程になると

卵を温めます。約12日間でひながふ化します。昼は2羽が交代で温めます。1羽が外から巣の入り口に向かつてピーピーと鳴くと、中からも鳴いて出て来ます。

しかし、夜の間はメスだけが温めます。ふ化後の夜、約7日ひなの保温もメスがします。普通の時は寝ているときも糞をするのですが、卵やひなを温めているメスは、夜の間糞を1度もしません。巣を不潔にしないためと、天敵に気づかれないようにするためです。朝、まとめて出しますから、この糞は重くて大きく、重さ1g、大きさ9.0×2.2mmありました（図6）。

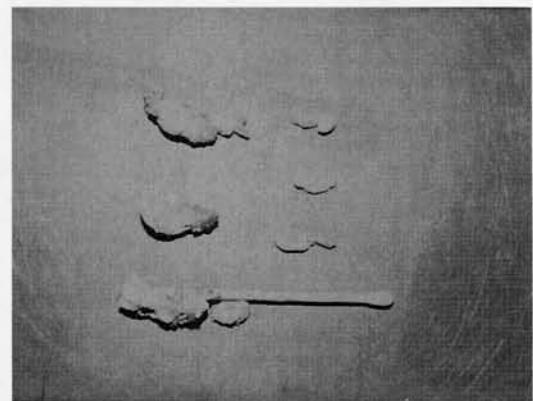


図6 夜、卵やひなを温めていたメスが朝出した糞

卵を温めているメスだけにあることがもう1つあります。それは、メスの胸の皮膚が数日間だけ露出することです。体の熱を卵によく伝えるためのようですが、オスにはできません。これを「抱卵斑」といいます。

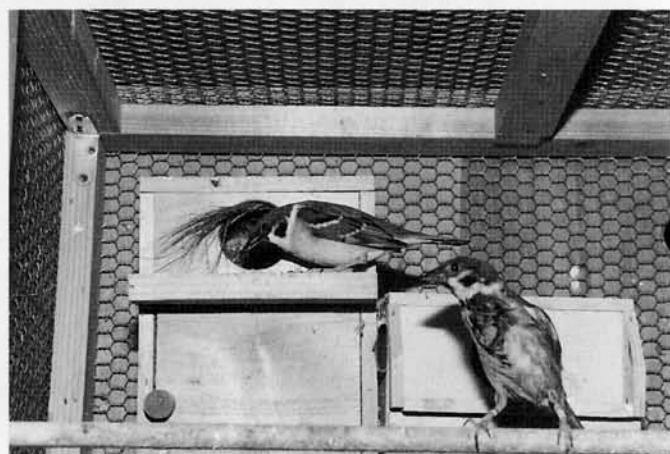


図7 メス（右）の抱卵斑

えさ（ミールワーム）よりも2羽で協力し、ひなは約14日間で巣立ちします。巣立ちが近づく頃メスは別の閉鎖空間に巣をつくり始め、次の子育ての準備をすることがあります。一方、オスはひなにえさを運んだり、ひなが巣穴から出ようとするのを胸で押し返したり、危ないことがあると、けたたましく鳴いて飛び回ります。

巣立ちしたひなは夜、オスの親鳥にくっついたり、両親の間で寝たりします（図8）。



図8 両親の間で寝る二回目の子育てのひな（右）と一回目のひな（左）

（2）スズメミルクでひなを育てる

スズメは昆虫をくちばしで運んでひなに与えます。しかし「すりえ」を運んでひなを育てたとの記録があります。それで、「すりえ」をどのようにして運び、どのようにしてひなに与えるか調べてみました。「すりえ」は、栄養のある粉を混ぜて小さくし、乾燥したものだけです。すると、2羽の親鳥は、昆虫の時と違った行動をしてひなを育てました。

「すりえ」をこれまでと同じように採ってひなのそばに行き、口から水で練ったようなえさを少しづつ出して与えました（図9）。このえさをスズメミルクと名付けました。自然でも、ごく小さい昆虫や種子をスズメミルクにしてひなに与えているように思います。

4 生きる力の大きさ

ある夏の夜のことでした。いつものように見に行くと大きなアオダイショウがオスを呑み込み、メスを尾だけ残して呑んでいました。ヘビを棒で籠から出すとヘビはメスを吐き出して逃げました。



図9 ひなにスズメミルクを与える親鳥

メスはしばらく動きませんでしたが、口に水を入れると動きました。このメスが次の春、木の枝に巣をつくり卵を4個生みました。

スズメの生きる力、ひなを増やそうとする大きな力に、また新しく触れました。

おわりに

小さいスズメは、厳しい自然の中で生き抜くために人里を選びました。人里には、前記のほかに、休む、寝る、隠れる、水（砂）浴びなどができる所があります。この人里で、生まれつきの力と進んで学習して得た力の2つを使って、人や環境の変化に応じた行動をしています。都合がよければそのまま使い、欠けたものは補って使います。

今後、スズメにとってすみよい環境が続き、スズメのことがたくさん分かれれば、スズメがもっと力強く、もっと輝いて見えると思います。

おおた やすふみ（宇奈月町立浦山小学校校長）

「富山でバードウォッキング！」入門

高畠 晃

バードウォッキングを始めよう！

最近、身近な自然を再発見しようとする気持ちが、人々の心の中に少しずつ広まりつつあります。また、美しい自然や動物が出てくるテレビ番組が好きな人は多く、ほとんどの人が「バードウォッキング」という言葉を、一度は耳にしたことがあると思います。「バードウォッキング」という言葉が定着し、「探鳥会」（野鳥の観察会）の参加者が増えつつあるのは、野鳥の美しい声を聞いたり、かわいい姿を見たりすると、誰もが安らぎを感じるからではないでしょうか。

そこで、季節に合わせて富山県内でのバードウォッキングのしかたを紹介したいと思います。自然と親しむための手引きのつもりですので、気楽に読んでください。

春のバードウォッキング

日ざしがだんだん暖かくなり、木々の芽が顔を出し始めた頃、外へ出てそっと耳をすませてみましょう。きっと野鳥たちの声が聞こえてくることでしょう。春になると、野鳥たちは繁殖のために行動が活発になり、

さえずり始めるからです。

ところで、鳥たちは何と言って鳴いているのでしょうか。きっと一人一人違った鳴き声に聞こえてくるにちがいありません。けれども、昔から私たちは、「聞きなし」といって、鳥の鳴き声を人間の言葉に置き換えてきました。例えば、ツバメは「土喰って虫喰ってしぶ~い」と鳴いているように聞こえてくるのです。この他にも、代表的な聞きなしをあげておきましょう。

- ・ホオジロ 「一筆啓上つかまつり候」
- ・メジロ 「長兵衛、忠兵衛、長忠兵衛」
- ・ホトトギス 「特許許可局」
- ・フクロウ 「ぼろ着て奉公」
- ・センダイムシクイ 「焼酎一杯ぐい~」
- ・メボソムシクイ 「錢取り、錢取り」

おもしろいことに、センダイムシクイとメボソムシクイの姿はそっくりなのですが、そのさえずりは全く違っています。同じ種同士が混乱しないように、その種特有のさえずりをもっているわけです。さえずりには、なわばりの確保とメスを呼び寄せる機能もあり、この季節は繁殖のために大変重要な時なのです。

また、春は野鳥たちにとって、「渡り」の季節にあたり、夏鳥を観察するとてもよい時なのです。夏鳥というのは、春に南の地域から渡ってきて繁殖し、秋にはまた南の地域に渡る鳥のことです。富山では、キビタキやオオルリ、オオヨシキリ、カッコウやホトトギスなどが次々に春になると渡ってきます。特に興味深いのは、山で繁殖するためふだん低地では見られないキビタキやオオルリたちが、庭先や公園などで見られることです。鳥たちは海沿いに渡っていくことが多いので、特に海の近くの公園に注目してみましょう。富山県内では、新湊市の新港の森・高岡古城公園・富山市の呉羽山や馬場記念公園、入善町墓の木自然公園などの公園では、多くの夏鳥が渡り途中で羽を休めていきます。なかなか見られないバードウォッチャーのあこがれの鳥であるアカショウビンが、自分の庭先の電線にとまっていたという、大変幸運な人もいます。ひょっとすると、これらの場所の他にも鳥たちが集まるよいポイントがあるかもしれません。特に4月中旬から5月中旬にかけては、思いがけない夏鳥と出会う絶好のチャンスなのです。

また、水田の多い富山では、田植えの準備に忙しいトラクターの後を、カモメの群れがついて歩いているのをしばしば観察できます。一体何をしているのでしょうか。それは、トラクターが土を掘り起こすことによって追い出されてくる昆虫を、餌にしているのです。つまり、野鳥が人間をうまく利用していることになります。このように、他の動物（人も含む）の動きを積極的に利用する行動を「オートライシズム」と言います。

さらに、数は多くありませんが、田植えが終わった田に、ムナグロやチュウシャクシギなどのシギ類やチ

ドリ類などの姿を見ることができます。シギ類やチドリ類は旅鳥といって、日本より北で繁殖し南の地域で越冬する、渡りの途中で日本を通過する鳥です。南に向かう秋には海沿いでしか見られないのですが、春には八尾町などの内陸部でも見ることができます。

夏のバードウォッキング

初夏になると野鳥たちの繁殖の真っ最中になりますが、だんだん木の葉が茂ってくるので野鳥の観察はしづらくなってしまいます。しかし、野鳥たちにとっては、それで都合がよいのです。葉が茂っていないと、巣が丸見えになってしまい、すぐに外敵に見つかってしまうからです。

子育てのために、親鳥はせっせと餌を運んでいるのですが、一体どのくらいの餌を必要とするのでしょうか。ドイツの学者が調べたシジュウカラの仲間の調査結果によると、1年間になんと125,000匹ものシャクトリ虫の幼虫を食べていたそうです。つまり1羽のシジュウカラが生きていくのに、それだけ多くの幼虫が必要であり、それを養う植物が必要となるのです。まして、食物連鎖の頂点に立つ、ワシやタカの仲間がすんでいるということは、相当自然が豊かな所でないと生きていいくことはできないということになるのです。よって、野鳥は自然の豊かさを示すバロメーターと言いうことができそうです。



写真1 青虫をくわえたシジュウカラ

夏の盛りになると、ますます鳥たちが見にくくなります。木の葉が茂って見通しが悪い上に、繁殖が終わってさえずらなくなるからです。また「換羽」と言って、新しい羽に生えかわり、じっとしていることが多いからです。

さて、夏から秋にかけての話になりますが、海岸沿いでは、シギ類やチドリ類がまた渡ってきます。以前より数は減ってきましたが、それでも新湊市の埋立地、黒部川や常願寺川などの河口では、チドリ類のメダイチドリやムナグロ、シギ類のトウネンやソリハシシギ、キアシシギ、アオアシシギ、チュウシャクシギなどが次々に渡ってきます。中には、世界的にも個体数の少

ないヘラシギやカラフトアオアシシギなども混じっています。また、渡りの前半は成鳥が観察され、後半には幼鳥が観察されることが多いです。シギ類やチドリ類は、姿が似ているので、識別するのが難しいですが、よく観察してみると嘴がまっすぐで長いものや、下に大きく曲がったもの、上に反ったものなどがいて、それらを観察するのも結構おもしろいです。

秋のバードウォッチング

野鳥たちにとって秋の訪れは意外に早く、8月後半にはもうすでにカモの群れが渡ってきます。ところで、この季節のカモを見てみると、オスとメスの区別がなかなかつきません。通常、富山の平野部で繁殖しているカルガモ以外のカモ類のオスは鮮やかな羽をしており、オスとメスの区別は簡単です。このオスの美しい羽は「繁殖羽」と呼ばれます。ところが秋に富山に渡ってきたばかりのオスは全体が地味なメスのような羽になっているのです。これを「エクリプス」(さえぎられて見えなくなるという意味)と言います。エクリプスになると、外敵に対して目立ちにくくなるのです。つまり、カモたちは、外敵から身を守るために「衣替え」をしながら渡りをしているのです。

また、春とは逆に、夏に繁殖した夏鳥が南に向かったり、北の地域で繁殖し、冬を越すために冬鳥たちがやってきたりします。代表的な冬鳥として、ジョウビタキやツグミ、シロハラなどがあります。

この季節、夜に外に出てみると、虫の声と共に、野鳥たちが鳴きながら渡っていく声が聞かれることもあります。そんな時、私は必ず「キビタキ船長」の話を思い出します。



写真2 キビタキ

1954年の秋、北海道で繁殖したキビタキたちが津軽海峡を渡ろうとしていました。ところが運悪く、台風15号が近づいていたのです。そんな中、漁をあきらめて母港の下北半島の港に帰ろうとした田畠船長は、ある声を耳にしたのです。荒れる海をブリッジから見ると、数千羽、いやもっと多くのキビタキたちが、船に

とまり、あるいは、飛び疲れて波に消えているではありませんか。驚いた田畠船長は船中の灯をつけ、船をキビタキの救助艇にしたのです。キビタキたちは、船のあらゆる所にとまり、風としぶきから逃れようとしていました。そして、下北半島が見える所までできたら、キビタキたちは、半島めがけて一斉に飛び立ったそうです。船長は、荒れる暗い海を見つめながら、最後の1羽の姿が見えなくなるまでデッキで見送っていたのです。それは、もう夜明けに近い時刻であり、同じ朝、青函連絡船の洞爺丸が1,000人余りの乗客を乗せて津軽海峡の底に消えたのです。

冬のバードウォッチング

「冬は寒いので外へ出るのはちょっと」という人はいませんか。実は野鳥の観察が大変しやすい季節なのです。なぜならば、今まで茂っていた木の葉にじゃまされることなく観察できるからです。また、山地で繁殖したヒガラやコガラといったカラ類の仲間や、アオゲラやアカゲラなどのキツツキ類の仲間、ルリビタキやウソなどが平地に降りてくるからです。さらに、雪が降ると、雪のない所に野鳥たちが餌を求めて集中するので、目につきやすくなるからです。

観察のしやすさから言えば、じっくり観察することができるカモ類がおすすめです。県内では、富山市の神通川河口や富岩運河、婦中町の中央植物園内の池、庄川（高新大橋付近）、新湊市の貯木場や富山新港臨海野鳥園（海王バードパーク）などが種類が多く、観察に適しています。また、ハクチョウを観察したい場合は、富山市の田尻池に行けばよいですね。田尻池にはオオハクチョウの他にも、コハクチョウやマガモ・コガモ・ホシハジロ・キンクロハジロといったカモ類がすぐ近くで観察できます。望遠鏡のない人は、新湊市の「海王バードパーク」に備え付けの望遠鏡があるので、一度行ってみるとよいですよ。カモたちは、じつとしているようでも、よく観察してみると、オスがメスに求愛のダンスをしていることがあります。この求愛のダンスの仕方も種類によって違うので、ゆっくり



写真3 田尻池のオオハクチョウとカモ

観察してみるとよいですね。

変化する野鳥の世界

人間の生活スタイルがどんどん変化しているように、野鳥たちの世界も環境が変わるにつれて、その行動や個体数に変化が現れています。

例えば、アシ原の減少によって、夏鳥のヨシゴイの姿がなかなか見られなくなってきた。また、以前はたくさん渡ってきた冬鳥のツグミやカシラダカも急激に減少しています。はっきりとは言えませんが、繁殖地であるシベリアの環境の変化が原因の一つとして考えられます。さらに、食物連鎖の頂点に立つ、ワシタカ類やフクロウ類は、その数が大変気になります。イヌワシやクマタカ、オオタカなど、富山県では比較的多く見られますが、全国的に減少しつつある今、これらのワシタカ類がすめる環境を私たちが守っていかなければなりません。

反対に近年増えてきたと感じられる鳥もいます。カラスはねぐらの減少によって、一か所に集中するようになってきました。また、地球の温暖化が原因で雪が降らなくなったためか、分布が北上してきているミヤマガラスやツリスガラなどは、富山でも普通の冬鳥となっていました。特にミヤマガラスは最近多くなってきており、富山市や小杉町、大門町などの郊外で、多い時には数百羽の群れと出会うことがあります。ふつうのカラスに比べて、一回り小さく、^{くちばし}嘴が細くてとがっていて、成鳥では嘴の根元が白っぽく見えることで識別することができます。ちょっと古い図鑑には、主に九州地方で見られると書いてありますが、1989年に初めて県内で大きな群れが観察されてからは、毎年見られるようになってきました。その中には、ハトぐらいの大きさのコクマルガラスも一緒に混じっていることもあります、「何だカラスか」とうっかり見過ごすことは



写真4 最近増えているミヤマガラス

できません。

また富山県内で、ここ数年急に数が増えてきたカワウ。大きな川の河口や海で群れをなしているのをよく見かけます。1970年頃には全国的にも一時すっかり少なくなったカワウですが、逆に数が増えすぎて、漁業関係者との問題が起き、今度は駆除され始めたのです。

さらに、野鳥たちの行動にも変化が見られるようになってきました。本来は山地の崖で繁殖するチョウゲンボウの中に、富山市のビルで繁殖するものも現れました。また、ネオンの近くに巣を作り、夜間にもネオンに集まる虫などをとて子育てをするツバメなどもいます。まるで、深夜にコンビニに集まる人間みたいですね。これらのこととは、本当によいことなのか、じっくり考えてみる必要があります。

バードウォッチングのスタイル

これまで、季節ごとにバードウォッチングのポイントを紹介してきましたが、一口にバードウォッチングと言っても、そのスタイルは人によって様々です。そこで最後に、バードウォッチングのスタイルを紹介しておきましょう。

まずは、鳥の識別を中心に行なう人がいます。バードウォッチングをし始めると、観察が簡単ではないことに気付くはずです。鳥を観察するために、鳥に少しでも近づこうとするのですが、たいていは鳥の方が逃げていってしまいます。そこで鳥の姿や鳴き声の特徴を的確に覚える必要があるのです。ベテランになると、遠くに飛んでいる姿をちらっと見ただけでその鳥が何か分かるようになったり、かすかに聞こえる声でその鳥の名前が言えるようになります。

また、少しでも多くの種類の野鳥を観察しようとしている人もいます。そんな人は今まで何種類の鳥を見たか、ライフレストをつくっています。だから、まだ見ていない珍しい鳥を見るためだったり、情報が入ったとたん、九州や北海道までも飛んでいきます。

さらに、野鳥の行動をじっくり観察している人、野鳥の生態や分布を研究している人、鳥の写真やビデオを撮っている人、落ちた羽を集めている人、野鳥の声を録音している人、野外に出てただ鳥のいる環境にいることが好きな人など、様々なスタイルがあります。この他にも幅広い楽しみ方があるので、自分にあったスタイルを選べばよいでしょう。まずは、双眼鏡と図鑑を持って、野外に出かけることから始まります。

いずれにしても、バードウォッチングを通して、自然の中で飛びまわる美しい野鳥の姿に感動したり、時には自然の中で生きることの厳しさに触れたりしながら、自然を大切にする心を育てていきたいものです。

たかばたけ あきら（八尾町立杉原小学校教諭）